



南野悠介

さん

Yusuke Nono



縦も、さらに成長した彼の存在感は、3年前に比べ、見違えるようでした。夢をかなえた左腕、南野悠介投手。選抜高校野球大会に出場したばかりの明德義塾（高知）のエースが、福智町に帰ってきました。4月3日に、父・敦さんが監督を務める少年野球チーム「市小ガッツ」の後輩たちを指導。あ

こがれの先輩からアドバイスを受けた子どもたちは「先輩みたいに甲子園で活躍したい」と夢を膨らませました。「甲子園のマウンドは今までに経験したことのない雰囲気でも高まりました。最高でした」と白い歯をのぞかせた南野投手。「精神的にも肉体的にも甲子園での疲労は想像以上でした」と大舞台の3戦を振り返りました。

的にも甲子園での疲労は想像以上でした」と大舞台の3戦を振り返りました。

投じます。しかし、沖繩尚学のエース、東浜巨投手に抑えられ、3対1で惜敗。8強入りは逃しましたが、今春に明德義塾が得た2勝は、かつてのV候補の看板を背負い続けた時代へ戻るステップとなりました。南野投手は「夏は沖繩尚学を倒して優勝したい」とすでに気持ち切り替え、始動しています。

「中学では自分より大きな人ばかりで、レギュラーになれるか不安でした。しかし、レギュラーになれなくても、ここで頑張れば必ず自分の力になると信じて、3年間あきらめずにやろうと決意しました」。中学3年の時、南野投手は副キャプテンとして84人のチームを引っ張り、全国中学校軟式野球大会で優勝を果たします。9千2百校の頂点に立ち、全国制覇を成し遂げました。狭間監督からは、ひたむきにやること、努力を忘れず向上すること、センスだけではダメだということ学びました。その後、同高に進学した南野投手は、硬式と軟式の差を実感します。それを克服するため、早朝からの自己練習を毎日続けました。夜が明ける前に2km

夢の甲子園で2勝
甲子園での初戦は、出場36校中最高のチーム打率を誇る関東一（東京・南野）投手は切れのいい変化球を低めに集め、要所を締めます。7安打を許しながらも丁寧な投球で7三振を奪い、1失点完投。強力打線を見事に封じ、3対1で初戦を飾りました。

市場小2年生のときから野球を始め南野投手。高学年でエース・4番に

「これからは自分のやりたいように進んでほしい。ただし、ケガだけはしないように」と語った父・敦さん（市小ガッツ監督）。4月からは弟の昂平くんも明德義塾に進み、兄の背中を追います。



力強い投球を披露する南野悠介投手。最速137kmの直球を軸に、カーブ、スライダー、チェンジアップなど多彩な球種を織り交ぜ、スクリーンで勝負する。

第2戦の相手は中京大（愛知）。南野投手は序盤から変化球の制球に苦しみます。中学からバッテリーを組む松村祥捕手は3回から直球主体のリードに切り替え、南野投手も信頼する親友のミットを目掛けて全力で直球を投げ続けました。延長10回、137球の熱投。南野投手は打撃でも3安打の活躍をみせ、3対2で勝利を手にしました。



市小ガッツの後輩を指導し「夢をかなえるには努力が必要。苦しさを乗り越えて全国を目指して」とエールを送った南野投手（右）。この日、携帯には「お前の分まで投げて優勝する」と沖繩尚学のエース・東浜巨投手からメールが届いていました。

試合に登板し、7完投（完封2）。中学時代は内野手兼控え投手としての出場も多かった南野投手ですが、絶え間ない地道な努力でエースの座をつかみ、甲子園のマウンドに立ちました。「このまま甲子園に近い存在にして、後輩たちにつなぎたい。自分たちの代から、また明德時代を築きたいです」と南野投手。明德義塾のカラーである「守りの野球」という持ち味を發揮し、同校の復活を印象づけた4年ぶりの甲子園でした。

半のランニング、朝日が昇るころからピッチングフォームのチェック。調子の悪いときはひたすら走り、下半身を強化しました。さらに、自らに負荷をかける全力250球の投げ込みも幾度となく行ってきました。そして高校1年の秋、勝負球のスクリーンを覚えま

す。南野投手はこのころからチームで頭角を現し、昨年からの新チームで、伝統の背番号「1」を受け継ぎました。「やっともらえた」という気持ちと「自分につとまるかな」という不安がありました」と南野投手。重責を担いながらも、昨秋の公式戦では9試合中8

試合に登板し、7完投（完封2）。中学時代は内野手兼控え投手としての出場も多かった南野投手ですが、絶え間ない地道な努力でエースの座をつかみ、甲子園のマウンドに立ちました。「このまま甲子園に近い存在にして、後輩たちにつなぎたい。自分たちの代から、また明德時代を築きたいです」と南野投手。明德義塾のカラーである「守りの野球」という持ち味を發揮し、同校の復活を印象づけた4年ぶりの甲子園でした。



「これからは自分のやりたいように進んでほしい。ただし、ケガだけはしないように」と語った父・敦さん（市小ガッツ監督）。4月からは弟の昂平くんも明德義塾に進み、兄の背中を追います。

ここが自分のホームであり原点。

感謝を忘れず「夏」に挑みます。

親への最高の恩返し



profile 南野悠介【のうの・ゆうすけ】さん

▶明德義塾高等学校（高知県）3年、野球部のエース。市場小学校を卒業後、明德義塾中学校に進み、3年の時に全国中学校軟式野球大会で優勝する。丹念に低めを突く投球が持ち味で、信念は「打たせて取る」。第80回選抜高校野球大会では1人で3試合を投げきり2勝を飾った。左投・左打、直球は最速137km、勝負球はスクリーンボール。171cm、67kg、平成2年8月22日生まれ、福智町赤池車道出身。

夢をかなえた旋風投手。南野投手は甲子園で着た縦縞に甲子園の土がついたスパイクで赤池グラウンドに立ちました。「やっぱり落ち着きますね。ずっとここで練習してきましたから。自分のホームグラウンドであり、原点です」と懐かしそうに深呼吸。「小学生のころから緊張感を持って練習に臨めたことが大きい」と父・敦さんの指導を受けた日々を振り返りました。幼いころから大きかった父の存在。甲子園は自分の夢であり、かつて父が目指した夢でもありました。その夢の舞台に初めて立ったその日、南野投手はマウンド上で強くグロップを握りしめます。手のひらにあった言葉は「親への最高の恩返し」。故郷への感謝を胸に夏の甲子園に向けて、さらなる夢への挑戦が始まりました。

